

『新板福徳大根合戦』

— 影印と翻刻 —

児玉史子

当館は帝国図書館時代に購入された大惣本（名古屋の貸本屋大野屋惣八旧蔵）を中心として、多数の草双紙を所蔵している。近年においても、収集は継続され、わずかながらもその数を増やしている。本書『福徳大根合戦』も平成二年に購入された新収資料であるが、『国書総目録』『日本小説書目年表』等に未載であり、棚橋正博氏も『黄表紙総覧』に書名のみを紹介し、未見とされているので、本稿で簡単な紹介と翻刻を試みた。

一、書誌事項

請求記号 W114-31

形態 上・下二冊 十七・三×十二・八センチ 合冊の綴じ穴の跡がある。

表紙 黄色（元表紙） 右上方に「森宗」と墨書。

題簽 各冊左肩紅地絵題簽貼付 十三・七×九・二センチ

上冊

左に「新板／福徳大（根合）戦上」とあるが、「根」「合」の字は破損し「A52」と墨書されている。この外題の下に本屋の商標である「松」の字、右に二股大根を運ぶねずみの図（本文二丁表の場面）、下方に羊の意匠。

下冊

「新板／福徳大根合戦 下」の外題、その下に上冊と同じく「松」の商標、右に大黒とねずみの図（本文十五丁裏の場面）、下方に羊の意匠

丁付 上冊 一―五、下冊 六―十終

版心書名 上冊 衿つミ（四丁なし）、下冊 衿づミ（六―八）

九、十丁は書名は無く「〇」のみ。

作者名 十丁裏に「下田森宗画」とある。

商標「松」は江戸通油町の松村弥兵衛を示す。草双紙は本文中に刊記がなく、その題簽に示された商標、意匠から版元、刊年を類推することが多い。宝暦頃から各版元は、その年の干支

をデザイン化して同じ年の草双紙に共通に使用している。本書に描かれている羊の図は、安永四年乙未（一七七五）松村刊行の諸本の題簽に共通しており、『青本絵外題集 Ⅰ』、『黄表紙絵題簽集』の安永四年の項に、本書の上巻絵題簽が掲載されている。ちなみに、当館では同じ羊の意匠をもつ『軍法伊沢硯』、『振袖児手拍』等を所蔵している。いづれも諸年表で安永四年刊とされている。

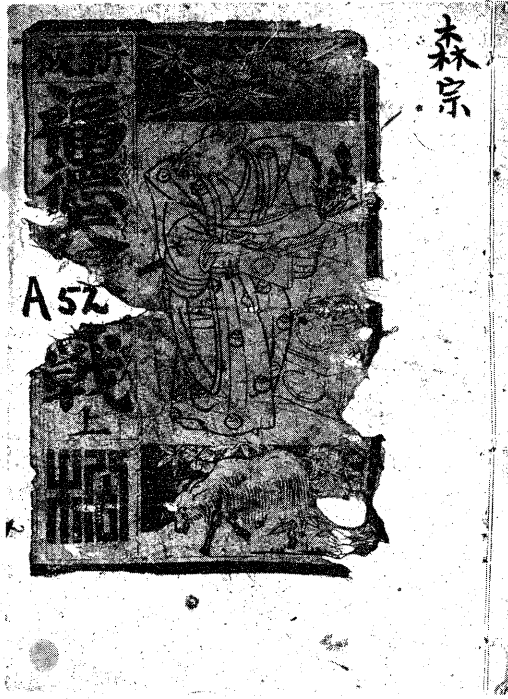
安永四年は、従来の黒本青本と内容的に一線を画し、『黄表紙』の最初となった『金々先生栄花夢』の刊行された年である。そのためこの年以降の草双紙は黄表紙とされる。本書も黄表紙に分類されるが、内容的には従来の黒本青本に属するものといえよう。

絵師下田森宗については、未詳である。森宗の名は、森野宗玉が落款に使用している。森野宗玉は明和頃の彫工で、鈴木春信の絵巻等にその名が見える。絵巻、子供絵等を描いたとされる。『原色浮世絵大百科事典』第三巻には、森野宗玉の作品として本書と共通する大黒天と二股大根を題材とする「限月」が紹介されている。

なお、類書としては、当館所蔵の「赤本昔はなし」のうちに『猫鼠合戦』(芳寅画)がある。本書とは、時代の隔たりが大きいと思われるので、おそらくこの本以外にも類書が存在するのではないだろうか。

二、 翻刻

凡例



(上冊表紙)

- 1、翻刻にあたっては、つぎのような方針によった。
- 2、当て字、仮名遣い、濁点は表記のままにした。
- 3、漢字は常用漢字に、変体仮名、ハ、ミはひらがなに、異体字・略字・合字等は現行のものに改めた。
- 4、通読のために、適宜句読点、かぎ括弧を補った。
- 5、意味をあきらかにするため、丸括弧で人名、漢字等を補った。
- 6、文は、基本的に右上から読んだが、場面によつては適宜順序を変えた。
- 7、各丁表・裏はオ・ウと略記した。



ここにねづみの大将(一)が左衛門とて、
 ゆたかに月日をくらしける。しかるにまい年(雷)
 きちれいにて、ふく神(二)よりいろくたからを
 おくり給ふ。

ねづみのかくれさと、ふく神(使者)のししや、「お
 れは御ちそうになるより此おうちのむすめ(三)
 をみたい、せ川(瀬川)とみさときているそふな。」
 とものねずみ市まつをする。

「こりやどうじやく、われが二百はちんぎ
 るやうだ。」

「またわれにとられたか、いたたく。」



一丁ウ・二丁オ

ねづみの大将こめがら左衛門大こくのおい
りのししやい、付る。

ねづみの大将こめがら左衛門

「いかにはつかの介、たいせつのつかいなる
ぞ。みちでしん物にはかたをいれるな。」

はつかのすけ大こくへのししやにゆく。

かろう、らうそくしん取左衛門

「せがれ、たいじのつかいなるぞ、ずいぶん
たいじにいたせ。」

のり引太郎

「わたくしつきそいまいるからは、おきづか
いなされますな。」

こめがらのそく女さかづきひめ、はつかの介
れんぼし給ふ。

「みちでけがてもしてたまな。お、しんきじ
や。」

(太刀持ちの家来)

「あのたいこんで、まぐろをにてくださいたい。」





こ、にね⁸こまたの大将は、つねくねづみ
共十二⁹しのかしらなりとい¹⁰をふるひ、ねこ

をないがしろにおもひ、ちうやみそあげるい
きどをり、此度ふく神へのしん物をさまたげ

んと、けらいのらのにやん八、同にやん平に
い、つけしん物の大こんをうばはせる。

「おのれやらぬぞ。しつかいおのれはひらか
なのかまだはいと、きている。」

「おれはしたむまになつた。」
かねてねこ共ねづみをひとくはいにせんと

せしところに、しん取左衛門一子はつかのす
け、のり引太郎、二人のつは物せんべん

ばんくわにた、かふ。ついににやん平をいけ
どる。

にやん八大こんをうはい立のく。
「にやんとおいらが仕うちを見る、中嶋天か

うでこちつけるぞ。」
「おのれのがさぬぞ、どろぼうめ。」

はつかのすけ、しん物をうばはれ、いたてん
のことくおつかける。

「これだんな、せつしやはねこにかぢられ
ました。あアさんねんやなア。あ、いたい、



これがほんのけたりふんだりた。」



三丁ウ・四丁オ

こめから左衛門、大こくへのしん物をうばはれむねんがる。

「はあしなしたり、さりなからくせ物をからめとつたはでかした〜。」

わんばこかちりゑもん

「おのれにくいやつた」

しん取左衛門いかる。

「おのれ主人の大せつのつかいを、みちでうばはれて、ふしがたつか、うつけ物め、かんとつたぞ。」

はつかのすけ、しん物をうばはれち、のかんきをうけ、のり引太郎にやん平をいけどり、はつかの助かんとつわびる。

(にやん平)

「われおもはずも、のり引太郎にまけて此身になつた。つまらぬ物た。しつかいおれが身はあだちかはらのなん兵へときている。」





四丁ウ・五丁オ

はつかの助ち、のかんどううけ、百せうになり身をしのふ。

さかつきひめ、はつかの介かんどうざれしあをしたいいきたり、此とこゝろでめくりあい、よろこぶ。

「さあ、わしといつしよに本ごくい御かへりなさりんせ。」

「これは、おまへ、さやうなされてち、うへ様御いかりなんといたしませふ。」

かうした所はふうかうが長うたをたのみた



ねこまたよろこぶ。

「てがらく、さだめてねづみめらが
てんじやうみとろふ。なんても此大こんをふ
ろふきにしておごろふ。」

にやん八大こんをうばい、ねこまたへさし
あげる。

「さて、ねづみ二びきつよいやつが御ざ
りました。にやん平はおふかたねずみにひか
れましたらう。」

(家来の猫)

「きでんひとり御かへり被成たか、さて
く。」



ねつみの大将大きにいきり、にやん平をひ
 きたしすでにうたんとせし所へ、ねこまた
 がおどりなかまのたぬきのはら助かけきた
 り、ねずみ共をふみちらし、にやん平をたす
 ける。

「おれがたいじのおどりなかまをなんとす
 る。それがしははら助といふおとこである、
 あつがもない、すべためら。」

「これはりやうじなされな。」

「わたくしはにけたがつもりさいくといた
 そふ。」



下冊
六丁オ

(ねこまたの大將)

「いかにたぬきどの、しんもつの大こんを
 うばいとり、そのうへきかうのはたらきにて
 にやん平を取りもどせしからは、ねづみ
 ひつじやうおしよせ申さん、されどもきでん
 とわれ、しよかつせんせいをまなび、ぐんりよ
 をめぐらさば、一ぢんにくいちらさん事たな
 ごころにあり。御ちそうに玉川のでつくり酒
 をもとめた。」

(家来の猫)

「此度おまへの仕うちは、市川りうの
 しばらくときております。」

たぬき原助

「いやさあのちいぐめらは、なん万ききた
 ればとて何ほどの事やあらん。」



六丁ウ・七丁オ

ねつみの大しやうこめがら左衛門、にやん平をいけどりしに、たぬきのすけにとりかへされ、むねんこつすいにてつし、このうへはねこまたがじやういおしよせ、いちぢんにふみつぶさんと、くにくさいくののらねつみまであつめ給ふ。なかにもしんとり左衛門一子はつかのすけは、じやく年なれ共大かうの若物ゆへ、めしいだしち、のかんどうゆるさせ、此たびのせんちんを仰せつけ給ふ。

らうそくしん取左衛門

「いかにはつかのすけ、此度のせんちんは大せつなるぞ、のり引太郎もろ共忠きんのはげんではたらけ、それともてきにはなづらをくはれぬやうにいたせ。」

わんばこかぢり右衛門

「おれはきがないぞ。」

のり(引太郎)

「いやさひやうそかへつてねこをはむといふ、きづかいはないぞ。」

はつかのすけ、ひめをいぎないきたり、せんちんをうけ給ふ。

(さかつき姫)



「この御さかつきは、とうぞわたしはねづみのよめ入りにしとぶこざりんすゑ。」



七丁ウ・八丁オ

はつかの助一ぢんにけちしてた、かふ。
(18) 魚鱗
「きよりのんそなへをかぢらずに、かくよくにかゝれ。」

ねごまたはかねて(19)したる事なれば、ちつともおくせつ、ますおとしのくんほうにて(20)すまんのねづみをみなころしにする。
のり引太郎

「どいつらもかすめらが、まけおった、おれが、かたつはしやぶるぞ。」

(手下の風)

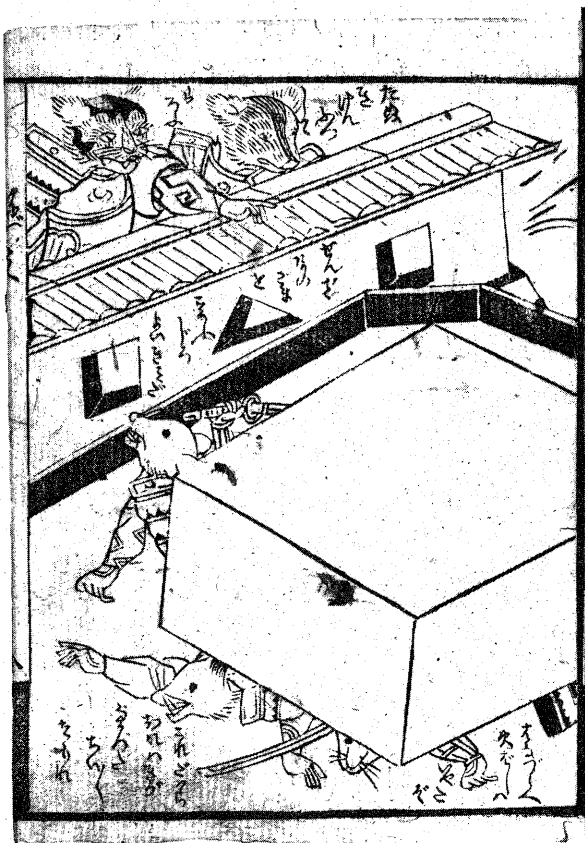
「めしつぶもないおとしにかゝつた、ちいぐ。」

「はなづらへ火ばしはいやたぞ。」

「これだからおれはきがなかつた、ちいぐたもれ。」

たぬきけんぶつしてわろふ。

「せんせい、あのさまを(21)ころふじろ、よいきみだ。」





八丁ウ・九丁オ

すてにみかたたいはんくはれすいくんにお
 よひしが、のり引太郎、はつかのすけ二人の
 ゆうし、ちゝのいさめんぼくなしと、てき
 をのりこへあしゆらのこどくかけまはり、ね
 こまたがかたうでとたのんだるなやん平にわ
 たりあい、ついにやん平をうつ。

「おのれいつぞやしん物をさまたげ、おれに
 てんじやうを見せをつた、いまおもしろい
 かそれきるぞ、いたいかく。」

「こいつはきつてもかたいやつだ。」
 「これはおのれらかくい物になつてねこの
 かふがあがつた、にやむさんぼう。」

(手下の鼠)
 「かうなげられてはこしがいたいぞ。」
 大こくでん、ねづみとねこのいつせんみな

く、ねこ共しうちわるきいきどをり給へ、
 こめがらよび、はかり事をあたへ給ふ。
 「なんちらわかふくろにいり、ふくへいに此
 めしをへいぎはにすておけ、ねこまたいつせ
 んをわすれ、くらわんところをうつべし、お
 れがはかり事すぎま〜か。」

「おまへ様のぐんりよは、しよかつりやうも



へいかうく。しかしこのかつほぶしのめし
は、わたしも少々たべたい。」



九丁ウ・十丁オ

ねこの大将いつせんにうちかち、ねづみどもみなごろしにせしうへは、きづかいなしと〔昼夜〕ちうやしゆゑんにふけりたのしむ。

ある時〔職〕じやうちうより見れば、大きなるあはびかに、〔上〕はくのめしにくまのぶしたくさんかけしをみて、是てんのさづけ給ふところへ、たぬきもろ共おどりかける。

大こくてんかねてはかりし事なれば、〔附〕しぶんはよしとふくろのくちをあげ給へば、すまんのねづみあらはれいて、ついにねこまたをうちとる。〔伊達者〕

「こはざんねん、おれほどのたてものが、めしにまよふてねづみともにならるゝか、せひもなやなア。」〔鼠〕

「こいつがからたはおたはら丁のまぐろときている。」

たぬきはら助ねづみがたのはかりことにおち、ねこまたはうたれ、たのむかたなくすごくくと山へかへる。

「おれはめしもくはずにむごいめにあつた、ほうくい。」





十丁ウ

かくて大こくでんのくんだりよにて、さしも
 手ごはかりしねこまたをほろぼし、大こくで
 んをしやうだいして御ちそう申す。

(大黒天)

「そのほうはずいふんと□□めやくしや付
 のまんなかへでやれ。」

(はつかの介)

「此度のぎは、おまへさまのおかけでねこ共
 にてんしやう見せました。」

(さかづき姫)

「こちの人、何も御さかながござりんせん。」
 はつかの助こめがらのそく女とふうふにな
 り、いゑとみさかへくらしける。

下田森宗画

註

- (1) ここに登場するねずみ達は、鼠の生態に関連する名がつけられている。こめがらは米びつ「米唐櫃」によるのであろう。
- (2) 福神の使者の持つ三方には、小槌、宝珠と、大黒天に関連するものがおかれている。
- (3) 瀬川富三郎(三代瀬川菊之丞)、女方。とくに娘、傾城役を得意とした。安永二年江戸に下り、瀬川富三郎と称す。同三年三月の「娘道成寺」は大当たりであった。俳名 玉川、路考、仙女と称す。同十一月菊之丞襲名。富三郎と称した時期から、本書の執筆が安永三年頃と推定される。
- (4) 市松。未詳、かるたの役の名か。
- (5) はつかねずみに由来する。
- (6) 進物は二股大根で、甲子の祭事に大黒天に供えるものである。十干十二支の最初の組み合わせの甲子の日は、様々な行事があり、子鼠の連想からこの日には大黒天を祭る。大黒天は、江戸時代には七福神の一つとして信仰された。富をもたらす神であり、鼠はその家来とされている。新春に出版される草双紙には、七福神がよく取りあげられている。
- (7) ろうそくの芯
- (8) 猫又、猫股、年老いた猫で、尾が二つに分かれ、よく人を化すとされる。猫股の着物の模様は、猫の首輪である。
- (9) 「ひらかな盛衰記」のお筆の父鎌田隼人。
- (10) 二代中嶋三甫右衛門、天幸は俳号。実悪、おもに敵役を勤める。天明二年没。安永三年三月は瀬川富三郎と共演している。
- (11) 「奥州安達原」の南兵衛(実は安倍宗任)、鶴殺しの罪人となつて都にひかれる。
- (12) 楓江、長唄の富士田吉次の俳号、はじめ役者であったが、長唄に転ずる。明浄瑠璃の祖とされる。明和八年没。

- (13) 狸の着物の模様は鼓である。
- (14) 諸葛亮、中国三国時代の宰相。字は孔明、戰略家として活躍。
- (15) 未詳、多摩川にちなむか。「多摩河泊にさらす手作さらさら」何そこの児のここだ愛しき」(万葉集 東歌)
- (16) 市川流の「暫」、歌舞伎十八番の一つ、五丁裏の狸の所作は「暫」を思わせる。
- (17) 兵鼠か、窮鼠猫を噛むのもじりか。
- (18) 魚鱗と鶴翼、ともに戦いの陣形のとりかた。魚鱗は中央をつきだし、鶴翼は中央が下がり、翼を広げたような形にする。
- (19) 鼠取りの仕掛け、升の下に餌を置き、ねずみがふれると升が落ちてかぶさるようにする。
- (20) 通常ますおとしには餌がある。面目ないにかけるか。
- (21) あわび貝、江戸時代には猫の餌の器として使われる。にやん八、にやん平の着物の柄にもなっている。
- (22) 熊野節、紀伊熊野地方で造られた饗節。
- (23) 江戸日本橋の小田原町、魚河岸の一部。
- (24) はつかのすけの袴に米俵の紋がついている。同様に七丁裏のねずみの旗印も米俵である。

主な参考文献

- 「改訂日本小説書目年表」(山崎麓編 書誌研究会改訂 昭和五二年ゆまに書房刊)
- 「青本絵外題集 I」(岩崎文庫貴重本叢刊 近世編 別巻上 昭和四九年貴重本刊行会刊)
- 「板元別年代順 黄表紙絵題箋集」(浜田義一郎編 昭和五四年ゆまに書房刊)
- 「黄表紙総覧 前編」(棚橋正博著 昭和六一年青裳堂書店刊)
- 「原色浮世絵大百科事典」(日本浮世絵協会展 昭和五五―五七年大

修館書店刊

〔春信全集〕（吉田暎二編 昭和十七年高見沢木版社刊）

〔浮世絵師伝〕（井上和雄編 昭和六年渡辺版画店刊）

〔歌舞伎年表 第四卷〕（伊原敏郎著 昭和三四年岩波書店刊）

〔娘道成寺 改訂版〕（渡辺保著 平成四年駸々堂出版刊）

〔近世邦楽年表 第二卷〕（東京音楽学校編 昭和四九年鳳出版刊）

〔近世子どもの絵本集 江戸編〕（鈴木重三、木村八重子編 昭和六十年岩波書店刊）

〔役者信夫石〕（安永三年刊）

〔明和伎鑑〕（明和六年刊）

（こだま・ふみこ 図書部図書整理課）

本稿の作成にさいしては東京都立中央図書館の木村八重子氏に種々ご教示いただきました。深く感謝いたします。

（下冊表紙）

